

令和 6 年 10 月 1 日

エンジニアリング協会 関係者の皆様へ

一般財団法人 エンジニアリング協会
専務理事

前野 陽一

今年の夏も、猛暑の日が続きましたが、ようやく秋らしくなってきたような気がします。早朝ランニングも、「汗みどろ」から解放されました。皆様、お元気でお過ごしでしょうか。

9 月は、例年台風の季節でありあまり驚かないのですが、台風 14 号が能登半島で大雨による災害を発生させたときは、「何故また能登半島が……」と思ってしまいました。年初の地震に引き続き、被災された皆様にお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復旧復興をお祈り申し上げます。

また、9 月 19 日（木）には、中国広東省深圳市で、日本人学校に登校中だった 10 歳の男児が 44 歳の中国人に刺殺される、という痛ましい事件がありました。中国に多くの駐在員とその家族や出張者を抱える当協会の賛助会員企業にとって、他人ごととは考えられない事件です。幼い命を奪われたご遺族の皆様の心中は、察することさえできません。ご冥福をお祈りしますとともに、日中両政府による、今後の在中国邦人の安全確保のための努力をお願いしたいと思います。

9 月は選挙の月でもありました。自由民主党の総裁選挙と立憲民主党の代表選挙があり、マスメディアは特に 9 人の立候補者が出た総裁選挙について、盛り上がっておりました。結果は皆様ご存じのとおりだと思いますが、早晩衆議院議員選挙が行われ、両党の新しい党首に関する国民の審判が下されることとなると思います。二つの選挙に関しては、言いたいことは山ほどあるのですが、さすがに「個人の意見です」と言っても、当協会に迷惑がかかりそうなので止めておきます。

以下、9 月の主な活動についてご報告申し上げます。

[主要な活動内容]

1 講演会等の開催

9月は、ビジネス講演会を4件実施しました。

10月は、ビジネス講演会を5件行う予定です。全て Zoom Web 配信で実施いたします。

また、「エンジニアリングシンポジウム 2024」を10月25日（金）に日本教育会館 一ツ橋ホールにて開催いたします。今回も、前回と同様、会場とオンライン（Zoom ウェビナー）のハイブリッド開催となっております。

多くの方のご参加をお待ちいたしております。

2 賛助会員トップインタビューの実施

9月5日（木）に、日曹エンジニアリング株式会社 代表取締役社長の久保俊美知様にインタビューを行いました。

日曹エンジニアリング株式会社は、日本曹達株式会社の施設部門から独立した化学系エンジニアリング会社であり、毒劇物や特殊な化学物質、高圧ガス、粉体などに関する豊富な知識と経験を有し、プラント設計から機器の選定・調達、配管、施工まで、常に最適を追求し続けておられます。

インタビュー記事がまとまり次第、当協会の Web サイトにアップする予定です。

3 企画会議 開催（エンジニアリング白書の公表など）

9月18日（水）に、企画会議を開催いたしました。

企画会議では、2024年度『エンジニアリング産業の実態と動向』（エンジニアリング白書）の公表など、最近の協会の活動状況についてご説明しました。

会員の皆様には、当協会の会員のページから、エンジニアリング白書の概要を見ることができます。是非ご覧いただければ幸いです。

(<https://www.ena.or.jp/information/pub/white-paper/page?id=70751>)

4 エンジニアリング功労者賞（個人表彰）受賞者に対するインタビュー

9月24日（火）に、2024年度のエンジニアリング功労者賞（個人表彰）を受賞された越川 昌治様（東洋エンジニアリング株式会社 専務執行役員）へのインタビューを実施しました。

特に、若手社員の方や、これからエンジニアリング企業で活躍しようと考えている学生の皆様に、お読みいただければと思っています。

5 その他

先ほど日本の選挙については、意見を述べることを差し控えましたが、外国の選挙は、少々「私の独断と偏見（?）」をお話してもいいか、と思っております。

現在、最も注目されているのは、11月5日に行われる米国大統領選挙ですが、その話は後にするとして、まずは、日本ではあまり注目されていない選挙の話をしたしたいと思います。

始めは、米国大統領選挙と同日に行われる米国上院議員選挙です。ご案内のとおり、日本のような議院内閣制と違って、米国では大統領の所属する政党と、議会で多数を占める政党が異なることはよくあります。しかも、上院は、予算の審議だけでなく、政府の主要職員の同意権を有しており、大統領に対立する政党が上院の多数派を占めた場合、大統領は國務長官や国防長官をはじめとする枢要なポストの人事を思うようにできません（ホワイトハウス内の人事（例：首席補佐官）はできるのですが）。

そこで、今回の上院議員選挙ですが、改選数は33議席（残り67議席は非改選）となっています。現在の議席配分は、民主党系50議席、共和党系50議席と真二つに割れていますが、副大統領が議長として「タイブレイク」の場合は1票を投じることができるようになっており、現状では、民主党優位の上院となっています。例えば、バイデン政権の目玉政策の一つである **Green New Deal** 政策を推進する「インフレ抑制法」は、ハリス副大統領の1票で上院を可決しました（共和党からは、「インフレ推進法」だと揶揄されていますが）

したがって、大統領となった政党（共和党でも民主党でも）は、少なくとも50議席を確保すれば上院をコントロールでき、逆に大統領選挙で敗北した政党は、51議席を確保すれば、少なくとも2年後の中間選挙まで、大統領をレームダックとは言わないまでも、困らせることができます。

今回の選挙で、民主党から共和党に議席が移ると思われているのは、モンタナ州です。8月19日以降行われた4回の世論調査で、共和党の新人候補（Sheehy氏）が民主党の現職（Tester氏）を6～8%の差でリードしています。モンタナ州は、共和党が議席をとる、というのが大方の予想です。

それ以外の州では、民主・共和両党双方とも現職が強いのですが、オハイオ

州（現職は民主党）は、現在共和党の新人候補と競り合っています。

ということで、米国上院は 51～52 議席を共和党が占める可能性が高く、仮に民主党のハリス副大統領が大統領選挙で勝っても相当に苦勞しそうです。

次に、更に日本ではあまり注目を浴びていないドイツのブランデンブルク州の選挙です。ブランデンブルグ州は、旧東ドイツの州の一つで、ポツダム市が州都であり、ベルリン市（州と同じ権限を持った特別市）を取り囲む形となっています。実は、旧東ドイツにおける州議会選挙は、今年 3 回目であり、先に行われたザクセン州及びチューリンゲン州の州議会選挙と同様、極右と呼ばれる AfD（ドイツのための選択肢）の躍進が目立つ選挙でした。他方、ブランデンブルグ州の選挙で、現在の連邦政府の与党である社会民主党（SPD）の得票は、AfD をわずかに上回ったものの、連立与党である緑の党と自由民主党は得票を減らしています。この選挙そのものは、ドイツの 1 つの州の選挙に過ぎないのですが、来年秋に予定されているドイツ連邦議会選挙の行く末を占う上で、重要な選挙だと思います。現在のシュルツ政権の不人気ぶりは、7 月に行われた欧州議会選挙でも明確となっており、旧西ドイツでは、最大野党（保守）のキリスト教民主同盟、旧東ドイツでは、AfD が躍進しており、現政権を構成する三政党は、いずれも敗北しています。シュルツ政権の不人気の理由は、ドイツ経済の不振とインフレにあると考えられ、一朝一夕で解決できるものではないと考えられます。AfD は、州レベルでも政権に入れていないため、連邦政府の中に入ることはないと思いますが、ドイツの政権が右傾化していくことは避けられないと思います。

最後に、今最も注目されているのが、米国大統領選挙です。日本のマスメディアによれば、「ハリス副大統領（民主党）有利」という論調が多いですが、米国の有名な（？）賭けサイト（Polymarket）では、ハリス副大統領とトランプ前大統領の賭け率は、ほぼ拮抗しています。7 つあると言われている激戦州も、アリゾナ州及びジョージア州はトランプ有利、ミネソタ州、ミシガン州及びウィスコンシン州はカマラ有利であり、最も競り合っているのは、ネバダ州とペンシルベニア州のようです。選挙人の数から考えて、ペンシルベニア州で勝利した候補者が大統領選挙に勝利する、というのが私の意見です。ペンシルベニア州以外の 49 州でいかに票を集めても、ペンシルベニア州を落とすと落選する、というのも不合理な感じがしますが、まあそれがルールですから仕方ないのでしょう。

ちなみに、トランプ前大統領を支持する人の中で、「性格は嫌いだが、バイ

デン政権の経済政策や不法移民対策を続けてほしくない」という意見が多いような気がします（もちろん、強烈な支持者もいますが）。他方、ハリス副大統領の人格を問題視する意見はあまりないように思えますが、副大統領としてバイデン政権の政策を否定できず、何か新しい政策を打ち出すと「何故それをバイデン政権発足当初から実施しなかったのだ」と言われています。また、ハリス副大統領は、当意即妙の受け答えが不得意のようで、「どんな質問を受けても、同じ回答しかしない」という批判を受けています。

ここで、レターを終えようと思ったのですが、敢えて、私の予想を申し上げますと思います。私は、トランプ前大統領が勝利するのではないかと、思っています。こう書くと、「お前はトランプ支持派か」と言われそうですが、別段トランプ前大統領を支持するわけではなく、今後の展開次第ですが、トランプ前大統領が勝つ可能性がほんの少し大きいのではないかと、思うだけです。以下、その根拠を申し上げます。

- ① 米国民の現在の最大関心事は、インフレーション、景気の先行き不安、不法移民問題であること。

これらの問題に対するトランプ前大統領の主張は結構単純で、インフレ対策については、エネルギー価格を引き下げするために、米国内のシェールオイル、シェールガスなどをどんどん生産する、ということです。また、不法移民に関しては、国境に巨大な塀を築くとともに、「**deport**（強制送還）」を徹底するとしています。これで本当に問題が解決するかどうかは分かりませんが、主張内容は単純明快です。

これに対し、ハリス副大統領の政策は、はっきりしません。また、小売店の価格つり上げ（**price gouging**）を規制する、という政策を打ち出していますが、「これは全く的外れで、物不足を生むだけだ」という批判が、左派系メディアからも出ています。更に、不法移民対策についても、「バイデン政権は何もやってこなかった」という批判にさらされています。

- ② トランプ前大統領が積極的にインタビューに応じているのに対し、ハリス副大統領はほとんどインタビューに応じないこと。

トランプ前大統領のインタビューは、**YouTube** にたくさん転がっていますが、ハリス副大統領のインタビューは数えるほどしかありません。しかも、回答が質問に的確に答えていないものも数多くあるように見受けられます。どちらの候補者に投票するか決めかねている有権者にとって、ハリス副大統領は頼りない、と映るのではないかと、思います。

- ③ 民主党の伝統的な支持基盤が、トランプ前大統領に侵食されていること。米国最大規模の労組である全米トラック運転手組合（通称チームスターズ）は 9 月 18 日、今年の米大統領選で共和党候補のトランプ前大統領、民主党候補のハリス副大統領いずれも支持しないと発表しました。チームスターズが組合員 130 万人を対象に実施した全国調査では、トランプ氏への支持が 59.6%、ハリス氏が 34.0%となっているとのこと。この労働組合は長年民主党候補を支援しており、今回の決定は、かなり異例と言えます。
- また、黒人、ヒスパニックなど「民主党の支持基盤」の中でも、トランプ前大統領を応援する人の割合が、やや高まっています。

以上は、私の印象であり、今回の大統領選挙は本当にどちらが勝つかわからないと思っています。

このレターを書き終えた後、9 月 27 日、レバノンの首都ベイルートで、イスラム教シーア派組織ヒズボラの「中央本部」を標的にした大規模な空爆をイスラエル軍が行い、ヒズボラの指導者ハッサン・ナスララ師が亡くなった、とのニュースが飛び込んできました。第三次世界大戦にも繋がりがねないのでは、との意見を述べる専門家もあり、予断を許さないところですが、これについては、情報が錯綜しているので、今回のレターで私の意見を述べることは致しません。

10月の講演会の実施について

令和6年10月1日
エンジニアリング協会
専務理事 前野陽一

10月は、ビジネス講演会を5件行う予定です。全てZoom Web 配信で実施いたします。是非、多くの方のご参加をお待ちいたしております。

また、既にご案内のとおり、「エンジニアリングシンポジウム2024」を10月25日（金）に日本教育会館 一ツ橋ホールにて開催いたします。今回も、前回と同様、会場とオンライン（Zoom ウェビナー）のハイブリッド開催となっております。

なお、正式なご案内は、別途お送りいたします。

1 第三次・担い手3法の改正概要

（10月1日（火） 国土交通省 不動産・建設経済局 建設業課

企画専門官 黒田洋介 様）

本年6月に成立した第三次・担い手3法（公共工事の品質確保の促進に関する法律、建設業法及び公共工事の入札及び契約の適正化の促進に関する法律）について、その背景、目的についてご説明いただきます。

建設業は社会資本の整備を担うとともに、災害時には最前線で活動する、いわば「地域の守り手」として重要な役割を担っています。第三次・担い手3法は建設業の持続可能な発展とそのための担い手の確保を目的としています。

法務部門の皆様を中心に、お聞きいただければ幸いです。

2 日本の水素戦略とグリーン水素製造技術の現状・課題及び国際動向

(10月11(金) 九州大学 水素材料先端科学研究センター

国際連携研究部門 特任教授 横本 克巳 様)

「グリーン成長戦略」において、14分野の一つとして挙げられている水素は日本のみならず、世界各国が注目し、特に低炭素、脱炭素に向けた水素利活用に向けた動きが活発化しています。

この講演では、これまでの日本における水素戦略などの流れ、技術開発の経過、将来の水素サプライチェーン構築、製造、輸送、利用のための取組み、課題などを紹介いただきます。併せて海外での水素戦略の概要、取組みについて紹介するとともに、九州大学 HYDROGENIUS の水素社会構築に向けた取組みについてもご紹介いただきます。

エネルギー部門や新規事業開発部門の皆様には、是非ご参加いただきたいと思います。

3 カーボンニュートラル (CN)・サーキュラーエコノミー (CE) 融合分野での 日 ASEAN 連携の実現

(10月18日(金) 株式会社三菱総合研究所 政策・経済センター

主任研究員 野本 哲也 様)

持続可能な社会の実現には、資源循環とエネルギーの政策融合、カーボンニュートラル (CN) とサーキュラーエコノミー (CE) の融合が必要不可欠であり、更に、日本の成長機会に繋げるためには、国際連携、特に ASEAN との連携が重要です。今回の講演では、日本企業がこうした分野でいかに活躍すべきかについて、お話しいたします。

ASEAN 関連のビジネスを行っている皆様を中心に、お聞きいただければ幸いです。

4 アジア開発銀行の取組みと今後の経済見通し（仮題）

（10月29日（火） アジア開発銀行（ADB） 駐日代表 田村 由美子 様）

講演の内容を入手次第、お知らせします。

5 全員参加型プロジェクトの未来：

AI とクラウドを活用した建設業務の最前線

（10月31日（木） 日本オラクル株式会社 建設&エンジニアリング事業部

マスター・プリンシパル・セールスコンサルタント

澤野 信彦 様）

オラクル社の建設&エンジニアリング製品は、世界中の重要施設の設計・建設プロジェクトで採用されており、Bidding、FS、FEED、EPC から引き渡しまで、すべてのフェーズでプロジェクト参加者全員がコラボレーションできるプラットフォームを提供しています。

今回の講演では、最新かつユニークな製品の特徴、全員参加型のプロジェクト・コラボレーションの重要性と実現のヒント、AI による業務支援例、クラウド上で完結するモデル間の干渉検出とその解決手法をデモを交えてご紹介いただきます。

幅広い部門の皆さまのご参加をお待ちしております。

この人に聞く! Interview

第4回

東洋エンジニアリング株式会社
取締役会長（前代表取締役社長）

ながまつ はる お

永松 治夫氏

世界の仲間と共に

～常に明るく前向きに「For the Project」～

1957年東京都に生まれる。

横浜国立大学工学部エネルギー材料研究施設修士課程修了

1981年4月 東洋エンジニアリング株式会社入社

2000年6月 Toyo Engineering & Construction Sdn. Bhd.
Managing Director

2013年4月 東洋エンジニアリング株式会社執行役員、
インフラ事業本部長代行 兼 インフラ事業本部
インフラプロジェクト本部長

2016年4月 同社常務執行役員、インフラ事業本部長

2017年6月 同社取締役、常務執行役員、インフラ事業本部長

2018年4月 同社代表取締役、取締役社長

2023年6月 同社取締役会長（現任）

2019年7月～2021年6月 一般財団法人エンジニアリング協会理事長

東洋エンジニアリング株式会社は、1961年の創業後、「エンジニアリングで地球と社会のサステナビリティに貢献する」ことを企業理念として、グローバルな舞台で、燃料アンモニア、合成燃料、SAFをはじめとする次世代エネルギーや循環型・低環境負荷分野等の「新技術・事業開拓」と、化学・肥料などこれまで実績を積み重ねてきた事業分野の「EPC強靱化」、の2つの戦略に基づき様々な取組を進めている、日本を代表する総合エンジニアリング会社です。

永松様は、1981年に東洋エンジニアリング株式会社に入社後、機械設計部門を皮切りに、プロポーザル本部、産業システム事業本部、プラント事業本部、海外事業本部など、様々な部署で活躍され、

2018年4月からは同社の代表取締役社長、2023年6月からは、現職である取締役会長をなさっております。

また、2019年7月から2021年6月までの2年間、（一財）エンジニアリング協会の理事長もお勤めいただきました。

今回のインタビューでは、長年エンジニアリング事業に携わってこられた永松様から、ご自身の経験を基に、総合商社や他の製造業とも異なるエンジニアリング会社の魅力について、じっくり伺いました。

お父様と二代続けて 東洋エンジニアリング株式会社に勤務

— 始めに、永松様が何故東洋エンジニアリング株式会社に入社されたのか、その経緯からお話いただけますでしょうか。

永松 実は、私の父も当社で働いていました。当時は、今と比べて社員数も少なく、父は1年の半分くらいは出張していました。世界各国を飛び回って、人形、置物、おもちゃを買ってきてくれ、エンジニアリング会社というのは、世界中いろいろな場所に行けて面白いところだな、というのが、子供の頃の感想でした。父の勤め先を書くこともあり、「エンジニアリング」というものを身近に感じていました。

週末は一緒に遊んでもらったりして、家族で楽しく過ごしていたのですが、1972年に飛行機事故で帰らぬ人となってしまいました。私が高校1年生の時です。

— 思春期の多感な時期でもあり、大変ショックでしたでしょうね。

永松 確かに大変ではあったのですが、夫を亡くした母親や、息子を亡くした祖母のことを考えると、「自分がしっかりして家族を守っていかなければならない」と考えました。また、「精神的な負のスパイラル」に陥ってはいけなく、と思ったのです。友達や父の同僚の皆さんにも助けられて、何とかこの苦境を乗り越えました。

— 周りの支えがあったのに加えて、永松様ご自身の精神力が強かったのでしょうか。ところで、その後、横浜国立大学工学部に進学されたのですね。

永松 はい。学部での卒論テーマに「脆性破壊」を選び、大学院修士課程まで進みました。ちなみに、卒論の英文要約のタイプ打ちは、妻に助けてもらいました。

私が学んでいた研究室では、当時としては珍しく、産学連携研究を積極的

に行っていました。1978年に、宮城県沖地震という大規模な地震が起こり、仙台市の石油タンクから石油が漏れる、という被害が出ました。そこで、このタンクを設計施工したエンジニアリング会社から、共同研究の申し出があり、私もこれに参加することとなりました。その会社は当社ではなかったのですが、「父親と同じ会社に行かなくてもいいか」と思い、その会社に就職しようか、と考え、家族にも話をしました。ところが、そのことが家族を通じて当社の関係者に伝わってしまい、「是非東洋エンジニアリングに來い」という話になり、当社に入社することとなりました。

最初の配属先は設計部門 ～勉強会ではボコボコに～

— 入社されて、最初の配属先は設計部門だったのですね。

永松 タワー、ベッセル、熱交換器などの压力容器を設計する部門でした。まず感じたことは、皆さんが大変優秀な方々だということです。当該部門の先輩に、後に当社の社長となる中尾さんがいたのですが、彼が中心となって、若手4人でASME規格の勉強会を定期的に行いました。持ち回りなので、4週に1度は題材を見つけて先輩3人の前で発表せねばなりません。突っ込みが厳しくボコボコにされ、当日は会社を休もうかと思ったことも何度もありましたが、お陰で压力容器の設計のイロハを学ぶことができました。

— 入社早々大変でしたね。そのほか、大変だったことはありますか。

永松 1983年に、マレーシアのガスプラントのサブアサインとなり、Export Terminalの二重殻低温タンクの設計、製作、現地工事、そして試運転まで一貫通で担当しました。その際、作業効率を上げるために、側板を地上で溶接してから上架したところ、真円であるべきタンクが、ちょっと「かぼちゃ風」

になってしまい、客先から「作り直せ」とのクレームを受けてしまいました。先輩がFEM解析による健全性を客先に説明して、何とか事なきを得ましたが、冷や汗をかいてしまいました。「次の設計では、こうしたミスは絶対にしないぞ」と思っていたら、プロポーザル本部に異動になってしまいました。

必死に勉強して 「海外進出の専門家」に

— 異動先では、どのようなお仕事をされたのですか。

永松 プロポーザル本部では、プロジェクトの積算などを担当していたのですが、2年ほど経って、新設された産業システム事業本部に異動となりました。

この本部での仕事でまず思い出すのが、ある医療機器メーカーにおいて、海外進出の専門家として、3か月間講義を行ったことです。当時、私の海外経験といったら、マレーシアでの約2年間の勤務だけでしたので、「そんな無茶な!」という心境でしたが、自分を奮い立たせ頑張るしかありませんでした。頼りになるのは当社のマニュアルだけで、その内容を必死に勉強しお客様の前で講義する、という薄氷を踏む思いを3か月間続けました。結局、先方の海外進出計画は延期となり実現しませんでした。当社のマニュアルの難さを心底感じましたし、その後の私のキャリアにとっても、当時の勉強が役立ちました。

Toyo-Malaysiaの 立ち上げに尽力

— いろいろとご苦労をされているのですね。その後、思い出に残るお仕事といったら、どのようなものがあるのでしょうか。

永松 米国やマレーシアにおけるブラウン管工場の建設などを担当していましたが、マレーシアでの仕事はかなり



2000年頃、Toyo-Malaysia スタッフ達と



2010年代前半、FPSOの完成(出航・Sail Away)
客先PETROBRAS社・協業先MODEC社・BrasFELS社
(Shipyards)メンバーと

多くなっていました。

そうした中、当社の中で、「営業拠点であるToyo-MalaysiaをEPC拠点とし、メンテナンスや中小規模のプロジェクトを自前で遂行するようにすべきだ」との話が浮上し、私も「大賛成です」と言ったところ、なんと私がその責任者(社長)に任命されてしまいました。今にして思えば、43歳の私をよく社長に選任したな、と当時のマネジメントに感謝する次第です。ちょうど2000年代前半で、当社の業績も厳しく「Toyo-Malaysiaを、できるだけ早く一本立ちさせくれ」と言われていました。マレーシアのプロジェクトで活躍していた現地の方々5、6人を社員として迎え、皆で業容を整えるとともに、案件獲得に奔走しました。お陰様で、Toyo-Malaysiaは、4年後には従業員100人、売り上げ30億円の小さいながらもEPC拠点となりました。

——永松様は、あっさりとおっしゃいましたが、マレーシアで会社を発展させることは、並大抵のことではないと思います。技術的な問題以外に、労務、経理、法務といった様々な仕事をどのようにこなされていたのですか。

永松 私自身は、全ての仕事をこなせるスーパーマンではないので、会社の内外で「それぞれの仕事をできる人をお願いする」ということで乗り切りました。私の場合、10年間くらいマレーシアにいたので、「人間関係のネットワーク」が出来上がっていたのだと思います。そこさえつかめれば、仕事の8割は終わったものとも言えます。

海外勤務は、できれば「家族同伴」がベスト

——永松様のご経歴を見させていただくと、国内勤務22年間に對し、マレーシアで14年間勤務されています。マレーシアには、ご家族もご一緒に行かれたのですか。

永松 その通りです。殆どの期間を運良く家族同伴で行くことができました。最近の若い又は中堅の社員も、海外に行く時には家族帯同を希望するケースが多いと感じます。仕事を終えて帰宅しても一人きりというのは、ストレスが溜まります。本人にとっても家族にとっても、海外生活は刺激的だと思うので、社員の皆さんには、「是非家族帯同で海外勤務をしてほしい」と伝えています。

私のケースを例に挙げれば、娘は、小学校2年生の時にマレーシアに行き、最初は日本人学校に通っていましたが、中学校2年生の3学期から、地元のインターナショナルスクールに通うようになりました。教育は米国式なので、バドミントン、テニスとオーケストラの3つのクラブに入り、様々な国の人と知り合いになりました。当然英語の実力も、親とは比べものになりません。また、当時住んでいたマンションには、テニスコートとプールがついていましたから、妻は、テニスやゴルフを楽しんでいました。娘が高校3年生の時に、私は日本に帰国することとなったのですが、娘の進学のこともあり、私だけが日本に帰る「逆単身赴任」となりました。

——ところで、日本人は一般的に英語が苦手、と思うのですが、永松様は、どのように英語を勉強されましたか。

永松 私の大学は横浜にあったので、結構外国人の友達もいて英語に触れる機会がありましたが、本格的に勉強したのは、仕事上、どうしても使わなきゃいけない、となった時からです。そうすれば、勉強に身も入るし、コミュニケーションが取れるようになります。英語以外の言語についても、同様だと思います。

多種多様な仕事をできるのが、エンジニアリング会社

——ご自身の人生を振り返ってみて、東洋エンジニアリング株式会社で働き続けて、満足されていますか。

永松 大変満足しています。私は、海外における仕事に興味がありましたが、大学で理科系の勉強をしたので、商社での仕事は少し違うな、と思っていました。他方、一般の製造業に入社すると、基本的には工場と同じ種類の製品を造り続けることになり、これも何か刺激が足りないのでは?と若気の至りで考えていました。その点、エンジニアリング会社は、海外勤務や営業ができ、かつ、私が学んできた技術も仕事に使える、というメリットがあります。

私の仕事の内容の変遷からもお分かりいただけるように、エンジニアリング会社には、設計、調達、工事、営業など様々な部門があります。個人の多様な能力を引き出す仕事がたくさんあり、「社内転職」が可能な会社である、と言ってもいいかもしれません。

エンジニアリング会社には、ゼネラリストとスペシャリストがいます。ゼネラリストは、様々な経験を通じて、全体を俯瞰できる能力を持つマネジメントタイプの人であり、私もこのタイプに属するでしょう。もう一つのタイプは、スペシャリストで、例えば、「設



2024年クアラルンプールで、Ethylene Malaysia 社の元社長と久々の再開



2024年、社内の屋外“ビアパーティー”でのバンド姿

第2は、人とのつながり、ネットワークを大切にすることです。お客様との関係でも、社員同士の関係でも、相手の気持ちを考え、相手の長所をよく見るようにすることが重要です。エンジニアリング会社の社員にとって必要なことは、「プロジェクト完遂のために、一緒に何かに取り組み仕上げる」よう、常に明るく前向きになることだと思っています。当社の実施する「エンゲージメント・サーベイ」によれば、「当社は、人の横のつながりに関する満足度が高い」との結果が出ており、この伝統を維持していきたいと思っています。

第3は、スペシャリストはもちろん、ゼネラリストであっても、コアな得意分野を持つことです。今後AI利用が普及していく中で、詳細設計のような業務はAIに委ね、より創造的な業務にチャレンジする時代になると思います。是非、様々な勉強を続けていってほしいと思います。

——本日はありがとうございました。



インタビュー後記

永松治夫様に、(一財)エンジニアリング協会の理事長をお勤めいただいた時期は、ちょうどコロナ禍と重なり、残念ながらあまりお話をする機会に恵まれませんでした。したがって、今回、永松様にインタビューを行って、改めて永松様の仕事に向けた考えや、明るいお人柄を知ることができました。

永松様は、ドラムを19歳の頃から趣味となさっておられます。最近は小さいライブハウスを、何組かのバンドで借り切って、演奏会をされることもあるようです。カッコいいなあ。

聞き手：当協会専務理事
前野 陽一

計のプロフェッショナルになる」といったタイプの方です。ただし、スペシャリストを目指す場合でも、設計部門にただけでは、「設計のプロフェッショナル」にはなれません。自分が設計したものが、建設工事を経て、試運転までいってお客様に引き渡されるまでの一連のプロセスを経験して、改めて設計のやり方を見直す、という経験を積んでこそ、初めて「設計のプロフェッショナル」として大成するのです。こうした経験を積んだ人は、引く手あまたであり、高齢者となっても就職先に困ることはないでしょう。

若い世代に伝えたい言葉

——今までの経験を踏まえて、学生を含む若い方々にお伝えしたいことをお願いします。

永松 第1は、エンジニアリング会社は多種多様な職種があるので、仮に最初に配属された部署が自分の希望と違っても、そこで頑張ることです。例えば、設計を一生の仕事にしたいと考えている人も、調達や工事、さらには営業のことが分かってこそ、真に役立つ設計ができる専門家となるのです。



本資料の複製・転載・改変・再配布を禁止します。 No part of this document may be reproduced, reprinted, modified or distributed.

